絵本をもとにした子どもとの対話的表現活実践
～絵本『こどもかいぎ』～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年
内尾・権藤・田口・
中島・野間口・橋本
林・村田・松尾

題材とした絵本：『こどもかいぎ』

文:北村裕花
絵：北村裕花
出版社：フレーベル館　初版年：2019年

タイトル：「こどもかいぎ」

配役：けんた（田口）、らん（村田）、りく（林）、みか（権藤）、まさと（橋本）、あゆみ（野間口）、お母さん（中島、内尾、松尾）、ナレーション及び撮影（内尾）、BGM（松尾、中島、内尾）

担当：プロデューサー（田口）、衣装（内尾）、小道具（内尾）
カメラ・音（松尾、権藤）、報告書（村田）

1. 題材「こどもかいぎ」選定の理由

こどもかいぎは、保育室でこどもたちが「おこられたときはどうしたらいいか」について会議をする絵本である。この本のなかで、こどもたちは普段どんな時に怒られるかなど家庭や保育園でのことを沢山話すという物語である。自分の意見を言うことはこどもが成長するにあたってとても大事なことだ。普段、自分の思いや気持ちをなかなか口に出せない子や、表現できない子も多くいると思う。こどもかいぎを見て、こどもたちが少しでも自分の気持ちを言える機会を作れたらいいなと思い、この絵本を選定した。また、この絵本のお話の中で怒られたら、まず謝るという意見が多くでていて、謝るにも怒った謝り方、ふてくされた謝り方、反省している謝り方、色々な謝り方があり、それも面白いなと思った。5歳児の子どもたちが、どのような謝り方をしたらいいかを考えてくれるかと大変興味深かった。3.4歳児には少し難しい絵本であり、この題材は、ストーリーだけでなく、5歳児の子ども達に適した絵本であると思う。　以上のことから、私たちのテーマである「絵本を通じて嬉しい、楽しい、悲しいなどの感情を抱き、自分の気持ちや思いを口に出したり、表現したりできるようになる」を5歳児に感じてもらい、体験してもらうことに適していると考え、本題材を選んだ。(内尾)

2.「こどもかいぎ」

「こどもかいぎ」のリアルな雰囲気や意見のやり取りを楽しんでもらうために、こどもたちに参加してもらう手法を考えた。

参加型
「こどもかいぎ」の中で、ひとつの議題に対して、こどもたちの意見をきいたり、導入ではシルエットクイズを行うことでスムーズに子どもたちとのやり取りをすることができ、こどもたちが楽しめるようにした。「こどもかいぎ」はこどもが主体で行っているものなので、そのことが伝わるようにこどもたちの意見を実際に聞いて、出た意見を行動に起こして、こどもたちの意見が反映されるように考えた。（権藤)

3.対話的表現活動で大切にしたこと

今回はリモートだったため、子ども達の声が私たちの方に届いていることを示すためにもこどもたちの声を復唱することを大切にした。また、子ども達の声を復唱することで子どもの意見や考えを受け止めることに繋がると思ったため、そのことを大切に活動した。特に、私たちのグループでは子ども達の意見をその場で再現して劇をすることを中心として活動したため、子ども達の意見がとても重要だった。言葉掛け一つで子ども達から返ってくる意見も違っていたため、その場に応じた声掛けの仕方が大切だと感じた。(田口)

4.内容について

（1） 全体の構成

「こどもかいぎ」という絵本を題材に子どもの役になりきって園児たちと対話をした。カメラを2つ使い、保育室と家というように分けて行った。
1人のこどもが朝から怒られて元気がないのでお友だちがどうしたの？と聞く。そこで怒られたときどうするかという題材で会議が始まる。どんな時に怒られたか園児に尋ねて、怒られたときどうしたらいいかを聞く。その意見をこども役が、実際にお母さん役と一緒に演じてみる。その中には「泣く」、「笑って誤魔化す」という意見がある。それを実際に演じたら、もっと怒られてしまい、なかなか謝ることができない。そんな時、普段なかなか自分の意見を言うことのできないらんちゃんが「ぎゅーってするのはどうかな？」と提案する。それにみんなが賛成して、実際に怒られた時にぎゅっとしてお母さんに謝ることができた。最後にみんなで、私が伝えたいことを歌にして、それを歌い、こどもかいぎが終わる。(中島)

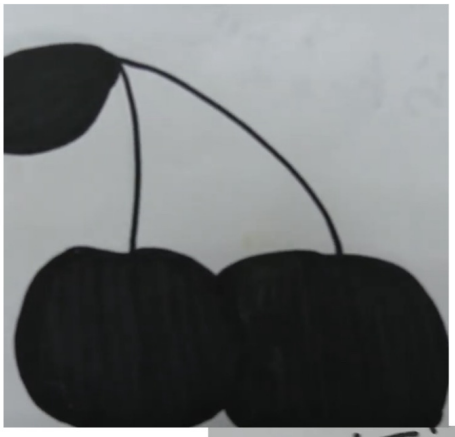
（2） 子どもたちとの対話について

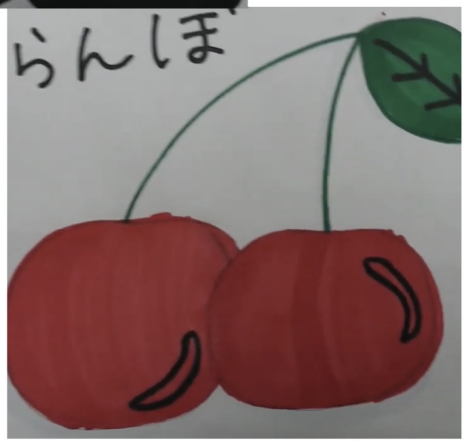
子どもたちとの対話については、子どもたちにどんな時に怒られるかを聞いて、それを元に実際に劇を演じるということをした。子どもたちのなかには私たちが想定していたものとは違う意見があり、改めて学ぶことがあった。
対話の中では、子どもが言ったことを繰り返したり伝わっているということを示すことを意識したりして本番に向け改善した。リハーサルでは私たちが予想していた以上に子どもの反応がよく、スムーズに対話ができたので本番ではやり取りを増やすなどの工夫をした。本番は、電波の関係もあり上手く対話できない場面もあったが、子どもたちの意見を拾いながら、難しい時はわたしたちの演技の中で答えを出して対応した。今回私たちは5歳児だったため、上手く会話が出来たが、ほかの年齢の子どもだと上手く会話ができない事もあるので年齢に応じた言葉掛けや、絵本選びも大切になってくると今回学ぶことができた。(野間口)

（3）演出の工夫（道具や見せ方）

写真①　「お母さんと子どものやりとり」

写真①について
　子どもとお母さんの身長差を作るために遠近法や角度を変えるなどの見え方の工夫をした。また、お母さんの表情だけではなく子どもの表情が分かるように立ち位置を試行錯誤して見つけ出した。そうすることで、見ている側がもっと見たい、続きはどうなるのか、自分がその立場だったらどうするのか考えることができるようにした。そして、興味を持ってもらえるように工夫した。





写真②「シルエットのペープサートを作った」

写真②について
　子ども役を紹介する時は、名前だけではなく動きを入れ、その子どもの好きな食べ物をクイズにしイラストをつけるなどの工夫をした。イラストを使ったクイズにすることで、子ども達が興味を持つことができ親近感が持てるようにした。

写真③「地図を使って、園と大学の距離を伝えている」

写真③について
　リモートで繋がっている園と学校がどれくらい距離があるのかを子ども達に伝わりやすくするために地図を準備して、飛行機や新幹線等の乗り物をイラストで作り動かすようにした。また、互いの都道府県の場所に印をつけ、より分かりやすくするなどの工夫をした。

写真④「保育室感が出るように道具を使っている」

写真④について
　劇をする際には、保育室と家との差が分かる様に保育室ではおもちゃや机、椅子などを使った。家では、壁紙を付け落ち着いた雰囲気が出るように工夫した。保育室から家に場面を変える時はカメラを別々に使うなど切り替えがスムーズにできるようにした。そうすることで、何が始まるのか子ども達もワクワクすることができると思う。この様に、子ども達がどれだけ興味を持って見てくれるかそして、楽しんでくれるか、私たちの伝えたいことが伝わる様に沢山の試行錯誤を行い劇をした。(橋本)

（4）音と音楽

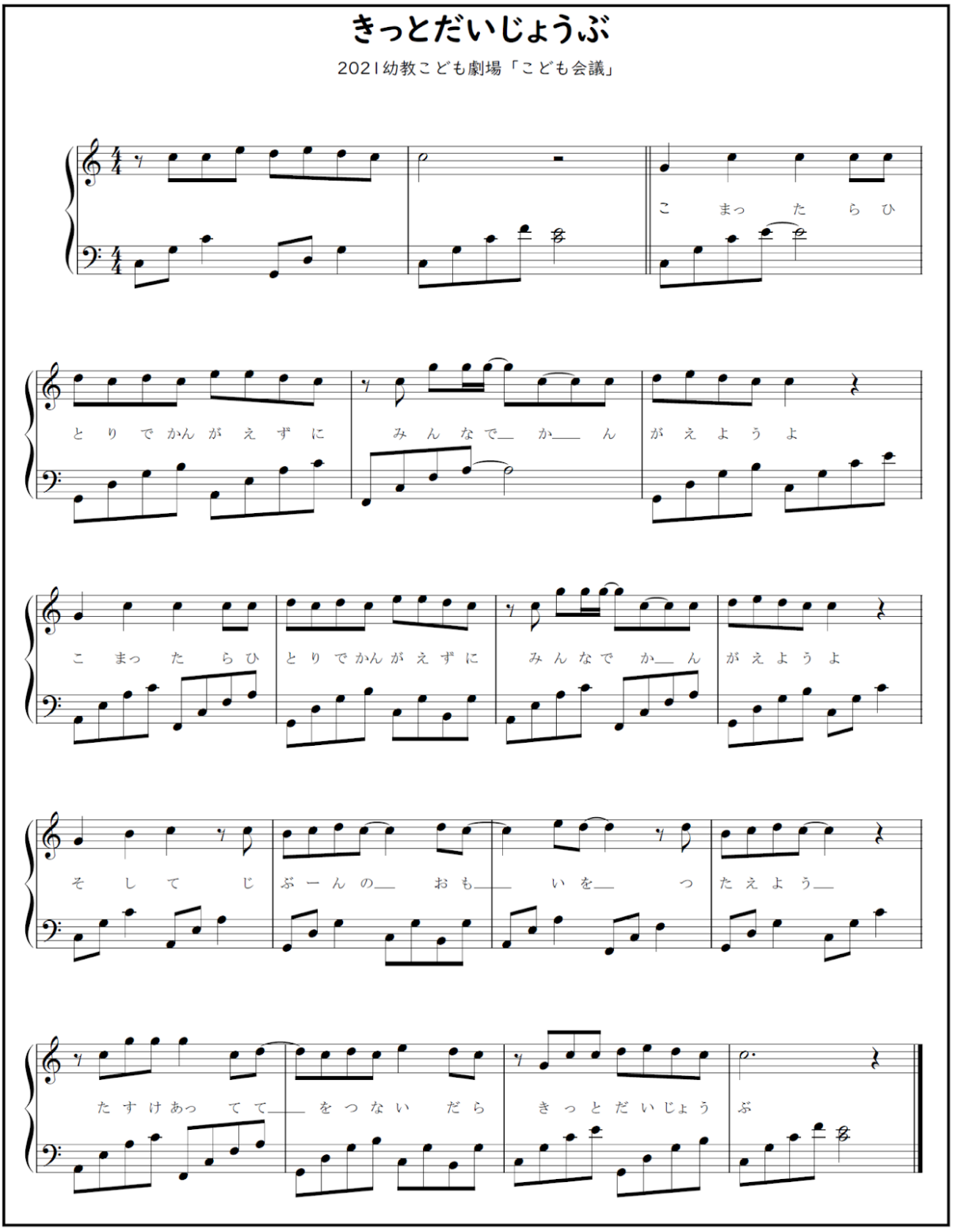
写真⑤「体を揺らしながら歌を歌う」

写真⑤について

　演技の途中で、子ども達が覚えやすいような短くてリズムがゆっくりした歌を自分達で作った。怒られたというエピソードから次の場面に切り替わる時に、その歌を歌うことで怒られた時はどうしたらいいんだろうと言う疑問を歌で問いかけて子ども達に伝わりやすいよう工夫をした。

　実際に子ども達の前で歌ってみると、一緒に体を揺らして音楽を楽しんで聞いてくれている様子が見られた。

創作した歌の楽譜


きっとだいじょうぶ
2021幼教こども劇場「こども会議」
こ まっ た ら ひ
と り で かん が え ず に
み ん な で か ん
が え よ う よ
こ まっ た ら ひ
と り で かん が え ず に
み ん な で か ん
が え よ う よ
そ し て じ
ぶ ー ん の お も い を つ
た え よ う
た す け あっ て て を つ な い だ ら
き っ と だ い じ ょ う
ぶ

写真⑥「エンディングの挨拶をしている様子」

写真⑥について
最後の歌の歌詞も「こどもかいぎ」を通して、子ども達に困った時などに1人で考えずに周りの友達と一緒に考えて欲しいという事を伝えるために、みんなで話し合いながら歌詞と曲を考えた。
今回みんなで曲を作ってみて、音楽を使って何かを伝える事の難しさを感じた。どのようなリズムで歌を作ったら子ども達が楽しんでくれるかなど何度も話し合いをして曲を完成させることが出来た。子ども達の反応も良く、歌を取り入れて良かったと思った。(村田)

（5） プレ・パフォーマンスにおける子どもの姿と省察

自己紹介のシルエットクイズの時に、子どもたちが色んな食べ物を楽しそうに答えていて、ただの動画を見ているのではなく、オンラインで自分の言っていることがスクリーンに映っている相手に届いて会話ができる事に驚きながら喜んでいた。また体を前のめりにしながら手を挙げたりして、自分の意見を言ったりする姿も見られた。初めは緊張していて、あまり話さない子でも、私たちと子ども達とでコミュニケーションを重ねていくうちに、だんだん話してくれる子どももいた。そして劇が終わったあとには、「もう1回見たい」「もう終わり？」などと子ども達が言ってくれる姿も見られた。プレ･パフォーマンスの動画の子ども達の反応を何回もみて子ども達がどのシーンで喜んだり、楽しんだりしているか、また、どのシーンで静かになっているのかを学んだ。そこから、もっと子ども達に楽しんで貰えるように、よい点はよりよくできるようにしたり、悪い点は何が悪いのかなどとみんなで意見を出したりして、プレ･パフォーマンスを通して沢山改善する事が出来た。 (林)

（6）取り組む過程での改善と工夫

写真⑦「子ども達に意見を聞いている様子」

写真⑦について
練習では子ども達がどのような反応をするのかを予想して、それに対応できるようにしていた。しかし、1回目では電波が悪く、子ども達の声が聞き取りずらかったり子ども達とのやり取りが少なかったりして、予定していた時間よりも早く終わった。子ども達の声が聞き取りづらい事と子ども達とのやり取りが少ない事をどのように改善していくか話し合った。また、子ども達が言った言葉を復唱したり子ども達への問いかけを増やしたりする事を心掛けて練習をした。
2回目では、子ども達が言った言葉を復唱する事と問いかけを増やす事を意識して行い、子ども達とのやり取りも増えたり復唱したりする事で子ども達もたくさん問いかけに答えてくれるようになった。そのことから、1回目よりも工夫して行う事ができたと思う。(村田)

（7）子どもたちの様子と表現

子どもたちは私たちの声かけや質問に元気よく積極的に答える姿が見られた。また、子どもたちの答えにない私たちの意見(笑ってみる、泣いてみる等)を言うと、「〇〇したら良い」など教えてくれる姿もあった。ところどころ電波が悪く上手く対話ができない場面もあったが、子どもたちの反応や身体の動きを見て何を言っているかを考え「もう一度言ってくれる～？」などの声掛けを行った。(松尾)

5.取り組みを通して得たこと

【野間口】

今回の幼教子ども劇場を通して、役割や各担当を決める場面ではスムーズにいった。それから台本を作り、今回は子どもたちとの対話ができるようにということでどこの場面で対話をするのか考えたりして、台本を作成していった。実際に子どもの言ったことを演じることを考えたり、子どもたちが言いそうな事を予想したりして台本を作り実際に演じた。リハーサルをした中でも自分たちが予想していたものとは違う答えが返ってきたりして、改めて色んな考えがあり、予想することはとても難しいんだと感じ、子どもの考えや意見はみんな違うんだと感じた。子どもたちの意見を受け止めることの大切さを学ぶことが出来た。 演技の部分では先生方からも沢山指導があり、本番直前まで迷うこともあったが自分たちなりに答えを出して本番で成功することが出来てよかった。発表を見てくれた園の子どもや先生から手紙が届いた中に書いてあったように、子どもたちの心に少しでも残ってくれていたら嬉しいなと思う。子どもを相手にどう伝えたらいいのか考えていくことがこれからも大切になってくると思う。4月から保育士になるので、子どもたちの気持ちをきちんと受け止めていきたい。子どもの意見は1つではないのでみんなの意見を聞ける保育者になりたいと思う。今回の発表で学んだ色んなことを活かしていきたいと思う。

【田口】

今回の幼教子ども劇場を通じて、たくさんの経験をし、沢山の学びを得ることができた。なかなか絵本を一冊に絞ることができず、絵本選びに苦戦したものの、子ども達に自分の思いや考えを大切にしそれを表現してほしい、みんなで考え話し合いをするきっかけになればという思いでこの「こどもかいぎ」に決めた。5歳児に対してどうやって表現したら伝わるのか、子ども達の意見を導き出せるのかなどの構成を考えたり役決め、カメラの位置などを全員で考え台本を作った。その中で、子どもの意見を即興で演技し表現するという参加型の方針で進めていくことを決め、子ども達からこんな意見が返ってくるだろうという予想をしながらたくさん練習を行った。初めは全く演技力がなく、ただ言わされている感じになってしまっていたり、ぎこちなかったりして上手くいかなかった。お互いに意見を言い合いながら演技力を高めるなど、少しずつ見え方などの工夫を行い、よりよいものにするために全員で協力した。リハーサルでは、思っていた以上にうまくいき、でもその中で反省点を見つけ出し本番に向けて改善した。本番ではリハーサルと違い北海道と広島の園ということもあり、園側に先生がいない状態でのリモートでほんとに不安で緊張した。しかし、子ども達も思ってた以上に反応してくれてうまく会話することができた。音に合わせて首を揺らしてくれていたり、自分の思ったことや考えたことを表現したりしてくれて新たな子どもの意見なども発見することができた。こういう機会を通して自分の知らなかった園と出会えて嬉しかった。

私は主役のけんたくんを演じさせてもらったりプロデューサーという大事な役割をさせていただいた。それにも関わらず、何一つ役割らしい動きができてなかったなと反省するところも多くあった。それでもこの幼教子ども劇場を成功させることができたのは周りのメンバーがいたからだと思う。一人ひとりが意見を言い合いながら協力して活動し、その意見が組み合わさっていいものを作り上げることができた。自分達で作詞作曲して歌を作ったり、演技力が上がるまで何度も練習をし、互

いに言い合ったり、カメラの位置を何度も調整して見え方を工夫したりなど、難しかったこともたくさんあった。しかし、みんなで肩を組んで円陣をつくり励まし合ったり、終わったらみんなで拍手しあって笑顔で話したりと学生時代でしか経験できないかもしれないことができて本当に楽しかったし、達成感がすごくあった。この幼教子ども劇場を通して、自分の意見を大切にすること、言い合うこと、協力すること、伝え方の工夫などたくさんの学びを得ることができた。4月から保育教諭として働いていく上で子どもの意見を受け止め、子ども達が自分の意見を大切にし表現できるような環境づくりを行うなど幼教子ども劇場での経験を生かし頑張っていきたいと思う。

【内尾】

今回の幼教子ども劇場を通じて、ひとり一冊ずつ選んだ本の中から、一つの絵本に決めるのに時間がかかった。5歳の子どもたちに何を伝えたいか、どうやって伝えたら伝わるのかなどみんなで話し合って考えて、「こどもかいぎ」に決めた。本を決めて次に誰が何の役をするかの役決め、担当決めをした。「こどもかいぎ」は、子ども役の6人と、裏方(ナレーション、ピアノ伴奏、お母さん役、先生役、音量、スイッチの切り替え役)3人。

役が決まってからは物作りと台本作りに分かれて作業をした。また、途中に歌う歌や、最後にみんなで歌う曲も作ったが、曲を作るのはとても苦戦した。台本作りは何回も何回も訂正をしながら子どもが理解できる言葉だったり、わかりやすい表現にして完成させた。台本が完成してからは各自でセリフを覚えて、何回も何回も通して練習に取り組んだ。子どもに質問して即興で演じたりすることを取り入れたので質問をして返ってくるような言葉を予想しておき、それに備えて練習したり演技をみんなで頑張った。リハーサルをしてみて、自分達が想定していなかった答えが返ってきたり、電波が悪くて音が聞こえづらかったりして反省点が沢山でてきた。演技面だったり、スイッチの切り替えなどのタイミングが違ったり、オンラインだからというのもあると思うが、改めて子どもたちに自分の思いなどを伝えるのが難しいと感じた。リハーサルから本番まで1ヶ月弱あったので改善点をもう一度みんなで考えなおした。本番は2回あり1回目、うまくいかないところもあったが2回目はその反省を活かすことができた。子どもにどうだったか聞いたら、「楽しかった」や「悲しかった」という感想がありいろんな感じ方があるんだなと思った。このこどもかいぎの劇をみて実際に子ども会議をしてくれたり、自分の思いや気持ちを言えるようになってくれたら嬉しい。保育園の先生からも感じることがあったなど嬉しい言葉を頂けてとても嬉しくて、やってよかったなと達成感を感じた。

今回の幼教こども劇場を通して、子どもに自分たちの伝えたい気持ちを明確にしてどうしたら伝わるかなど考え、伝えることがどれだけ難しいのかがわかった。これから保育者になるので子どもにどうしたら伝わるのかを考えて保育していきたいと思う。

【橋本】

今回の幼児教育子ども劇場を通して、多くのことを知り学ぶことができた。初めは、どの絵本で劇をするのか決めその中から子ども達に今伝えたいことや知って欲しいことは何なのかを考え、子どもやお父さんお母さんが出てくる「こどもかいぎ」になった。

　そこからが大変でみんなで役を分けて練習を沢山した。お母さんや子ども役、これまでやったことがないことをするので不安でいっぱいだった。子ども役をする時は、いかに私たちが子どもに見えるのか服装や声、道具を使い身長差を出したりして試行錯誤をした。そうすることで少しずつ役にも慣れてきてうまくいくことができた。また、場面ごとに動きを付けイラストを入れることで子ども達がもっと見たいと興味を持ち親近感が持てる様にした。
オンラインで実践でするということで不安が大きく、成功するか不安だったけれど、みんなで役割を分け練習していき臨機応変に対応することで子ども達に伝えたいことをしっかりと伝えることができた。短大生活の中でとても貴重な体験をすることができた。こどもかいぎの絵本でこのメンバーで子ども劇場をして本当に良かったと思う。
それを活かし、これから保育者として働いていく中で子ども達に伝えたいことは何か、知って欲しいことは何なのかを考え、自分ひとりだけでなくみんなと協力することによって出来なかったことができる様になるので連携を取り頑張りたいと思った。

【林】

　今回の幼教こども劇場を通して、多くの色んなことを学ぶ事が出来きた。まず、初めに絵本を1つ選ぶという事でみんなのしたいという本があって沢山悩んだ。対象が5歳児だったので、簡単な内容などではなく物語の本にしたくて子供達が身近に感じられる保育園の中の子供達と先生とお母さんお父さんなどが出てくる「こどもかいぎ」に決めた。まず、誰がどの役をやるのか絵本の中の登場人物と私たちの人数は足りているのかなどをみんなで話し合って決めた。そこからは、劇をする人と裏方と別れてセリフを紙に書いたり、自分たちで歌を作ったり、衣装や背景を作ったり、一連の流れなどを考えた。最初は演技も全く出来てなくて、セリフも、ゆっくり言ったり、強弱をつけたり、少し威張ったり、みんなが同じ口調で同じ特徴な棒読みにならないようにたくさん工夫した。また今回はオンラインだったので、カメラの近くに物を置いたり、足元に段差を作ったりすることで遠近法などの工夫もした。そして、みんなからの改善点などをよく読んだりしてそれもよくできるように努力した。同じ目線でアドバイスする事はすごく大事だと思ったし、違う案なども出てきて、色んな考え方があると思った。そして、オンラインならではの普通は遠く離れた県の子供達とコミュニケーションが取れたり、お互いの天気などを話したりしてすごく新鮮で楽しかった。またオンラインで電波が悪くても臨機応変に対応できる力もついたと思う。幼教こども劇場で学んだ、みんなとの団結だったり、達成感だったり、工夫だったりを卒業後の就職先の保育に活かして頑張りたいと思う。。このメンバーでしか出来なかったことだと思うので楽しかったし、いい思い出になった。

【中島】

今回の幼教こども劇場を通して、様々なことを経験でき学ぶことが出来た。最初は絵本を選ぶところから始まって5歳児を対象ということも考えながら決めることで悩んだ。そして絵本が決まりどのように子どもとコミュニケーションをとっていくか、どうしたら楽しんで参加してもらえるかみんなで話し合い進めていく中で私が難しいと思ったところは演技力だった。私は、こどもかいぎでお母さん役をして子

どもに怒るシーンがあった。最初は恥ずかしさもありなかなかほんとに怒ってるようにはできなかったが、練習を重ねていく中でだんだんほんとに怒ってるみたいにできるようになったと思う。また、お母さん役とこども役で分かるようにカメラの角度や台を使うなどして工夫もした。実際に子どもたちに見てもらった時は思っていた反応と違う場面もあり子どもならではの感情があるのだなと思った。また、オンラインで遠くの保育園と中継だったので時差や反応の遅れもあり、その時に臨機応変に対応する力も大切だなと実感した。でもなかなか遠くの保育園と関わることは出来ないので貴重な経験ができて良かったなと思った。みんなでアイデアを出し合ったりアドバイスをし合ったりしてこのメンバーだったからできた作品になったと思う。最後までみんなで成功することが出来て良かった。この経験を忘れず4月から保育士として頑張る。

【権藤】

今回の幼教こども劇場を通して、絵本を題材にして行った。ただ、「絵本通りに劇をする」というのではなく、劇を通してどういったことを子どもたちに伝えたいのかを考えながら行うのがすごく難しかった。この「こどもかいぎ」という絵本からどういったことを子どもたちに感じてほしいのか、どうすれば伝わるのかを皆で話し合い、工夫しながら劇を考えた。皆で考えていく中で、少しずつこういったことを伝えられたらいいなと思えるようになった。リハーサルを何度も重ねて、こどもたちがどう言った言葉を言うのかなども予想しながら、それに対する返答をいくつかパターンを考えてとすごく大変だったなと思う。自分たちが話すことばも子どもたちに伝わりやすいものであるのか、理解ができるのかなどを気をつけながら行わなければならず、絵本を題材にしているといっても、演じる時に少し変わったりもするので、そこを考えたりしながらしていくというのも簡単なことではなかったと思った。今回の幼教こども劇場では、子どもと接する上での伝え方や関わり方、工夫の仕方などを身をもって学ぶことができたと思う。また、自分自身が得られたものも多くあると実感した。これらを活かして今後も色んな取り組みをやってみたいと思った。

【村田】

今回の幼教子ども劇場を通して、絵本を1人ずつ選びその中から1つを決めるところから難しく、私達のグループは5歳児という事もあり5歳児にどのような事を伝えたいのかを考えながら絵本を1つに絞ることが難しかった。色々とみんなで話し合い、「こどもかいぎ」に決めた。絵本を決めてから、誰がどの役を演じて機材やピアノなどをどうするのかを決めて、それから物作りや台本を作っていった。台本を作る上で、子ども達に伝わりやすいように子ども達が理解しやすい言葉を使ったり子ども達が覚えやすいようなリズムで歌を作ったりなどたくさん話し合いながら台本を作成した。台本が完成してからセリフを覚えて何度も練習をした。子ども達への問いかけをするところがあったので、子ども達がどのような反応をするのかを予想しながら練習を行った。実際に演じてみて、予想していた反応と全然違う反応だったり電波が悪く子ども達の声が聞き取りづらかったりして、オンラインでのやり取りの難しさを実感した。子ども達それぞれ予想していた事と全然違う反応だったので、子どもの意見などたくさんあるんだと気付かされた。1回目での反省点を生かし

2回目では、子ども達の言葉を復唱したりやり取りを1回目よりも増やしたりと改善をして実際にやってみると、1回目よりも2回目の時の方がたくさん反応してくれて子ども達とのやり取りを楽しむことができた。子ども達への伝え方や表現の仕方の難しさを演じてみて改めて感じた。子どもに伝えたい事がある時に、どのようにしたら伝わるのかを考えながら保育をする事が大切だなと思った。

【松尾】

　普段関わることのない遠く離れた場所に住む子どもたちと対話をし、こどもかいぎの物語を進めていくのはオンラインならではだと思った。思っていたよりも子どもたちの反応が良く、積極的に質問に答えてくれる子どもが多かったと思う。子どもたちにより物語が伝わるように、準備段階ではどのような構図でカメラに写すか、どのように声かけを行うかを試行錯誤し本番前まで調整を行った。また小道具を使い大学の場所と子どもたちの住む場所の距離を示したり、どのくらい離れているのかを伝える工夫をしたりした。質問に対する子どもたちの答えも予想したが、実際に対話をしてみると予想していなかった子どもたちの答えが出たりして面白かった。オンラインでの対話を行い、接続の関係でうまく対話ができない場面があったり苦戦するところも有ったが、私たちが落ち着いて楽しんで幼教こども劇場を行うことで画面越しでも子どもたちにその雰囲気は伝わると思った。子どもたちと何かを行うときは私たちも楽しむことで、子どもたちの興味や関心を引き出すことができるのではないかと思った。